

駆け足で見てきたドイツ



ライン川を挟んで向かい合う環境都市フライブルクとストラスブール、詩情の古都ハイデルベルクをツアー仲間と過ごしたあと、8日間の一人旅。およそ南北700km、東西500kmの国土を鉄道マニアがジャーマンレイルパスをフルに使って駆け回ってきた。

ミュンヘンからシュバルツバルトへ向かう途中で乗り継ぎを間違えてオーストリアのブルデンツまで、ハンブルクから北へ車窓から風車を見るために国境を越えてデンマークのパドボルクへ、スイスのバーゼル、フランスのストラスブールと併せて4回ドイツからはみ出たことになるが、スイスとデンマークで通貨が異なるほかは越境を意識しなかった。ドイツは広くて狭い国であった。旅の印象を思いつくままに綴ってみた。

人： ストラスブールの路面電車でコーヒ色の幼児を連れだした白い顔のお母さんと乗り合わせたが、ここはフランスだと。ベルリンの hostel でナイジェリアから来た大柄の男と向かい合わせのベッドになったのにはいささか緊張したが、朝になって挨拶を交わすと気が楽になった。彼が大相撲に弟子入りしたいと言ってきたら、相撲協会はどうか対応するだろうか。ドレスデンで同室になった20歳のドイツ人学生は来年9ヶ月の兵役が待っていると言う。緑の党、勢力が伯仲する連立政権についても自分の見解を持っていた。皮膚の色を意識しない、視野を広げなければと思った。



自然： 面積はわが国とほぼ同じであるが、土地の広がり方が違う。何もかも伸びのびしている。内陸の都市に河がゆったりと流れて、観光船と貨物船が行き交う。省エネのレクリエーション、物流である。

色づき始めたマロニエと鮮やかな黄葉のスズカケノキが街を彩る、意外だったのはベルリン郊外・沿線に広がるアカマツの“森”。シュバルツバルトの南部ティティゼーではトウヒが生い茂り、黒い(=暗い)森を実感した。



街： 地図とコンパスを手にブラッツ(広場)をたどって歩いた。教会の尖塔と街角のモニュメントや噴水が景観を作っている。王や武将の像に歴史の重みを感じた。フライブルクでは、石畳の路に作られた溝をシュバルツバルトからの冷たい水が流れていた。

都市のターミナル駅はガラスのアーチが覆い、クラシックな駅舎が街の玄関になっている。路面電車と自転車が市民の足である。それは幅2m程の自転車レーンと電車に抵抗なく持ち込める仕組みによるところが大きい。大型犬も電車に乗ってくる。自転車や犬と一緒に、改札口を通らずに乗れる電車は楽しくて開放感がある。

フライブルクの自然エネルギー利用をコンセプトにするニュータウンが完成間近。太陽光発電はいうまでもなく、街ぐるみで雨水利用をはかり、路面電車の軌道敷きは芝生である。

ストラスブールではLRT(超低床・軽量の高性能路面電車)が縦横に走る。周辺の自治体と広域の連合

協議組織があるそうで、地域住民の意向を反映した合理的な行政がLRTにもなっていると思われる。

二度の戦いで焦土と化したドイツがよくここまでになった。ドレスデン聖母教会が燦然たる姿に復元されたのを、TVで見て感動された方がおられると思う。ミュンヘン、ハンブルクなどの市庁舎も古の姿を見せている。このように良き時代のイメージを大事にする一方で、無駄なことはしない、合理性が明確である。ゲージが同じのこともあって、ICE（超特急）もローカル列車と同じ線路を走るが、大都市間を最短で結ぶ幹線ルート of の工事が進んでいる。新幹線のように、線路だけでなく駅までも新設することはない。世界遺産のヴェルリッツ公園近くの地方都市デッサウは、人口が8.3万人でも立派な路面電車を走らせている。岡山で路面電車の延伸がなかなか実現しないのは、何が妨げなのか。社会の経済基盤について彼我の差を考えさせられる旅でもあった。



国際的にもEUで重きをなすのと、ややもすればアジアで疎んじられる日本、ドイツに学ぶことが多いのではないかと。地道な考えと努力の積み重ねが大事であると思う。 旅を終えて・・・ 中西 卓

写真は 上から ・高さ10m程もあるユーロ通貨をPRする電光看板（フランクフルト） ・歩行者と自転車が共存する街（フライブルク） ・LRTの路線が交差する街一番の駅（ストラスブール） ・ケルン中央駅

(2005年10月 エネミラ通信13号に寄稿)



ブルデンツのプラットホームから

2005/10/04 13:27



ストラスブールのLRT

2005/08/30 15:07



ラインを行くコンテナ

2005/10/05 13:52



カールスルーエでSLに出会う